

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	谷口 永里子
論文題目	フランス語の従属節中の倒置と情報構造—コーパスを用いた機能言語学的研究—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の目的は、大規模なコーパス調査およびインフォーマントによる容認性判断を用いた分析を通して、フランス語の従属節の中における倒置現象は「情報の重要度」という概念によって説明可能であり、従属節の中にも情報構造があることを示すことである。本論文は全6章で構成される。</p> <p>第1章では本論文で分析対象とする従属節の種類を提示し、従属節内が動詞＋主語の順になるものだけではなく、場所句＋動詞＋主語の順になるものも個別に分析する方針が示される。そして、従属節内での倒置を説明するためには、情報構造の分析で用いられてきた「焦点」に代わり、「情報の重要度」という概念が必要となるという仮説を簡略的に提示している。</p> <p>第2章は先行研究をより詳しく検討し、本論文で用いる「情報の重要度」という概念を定義することを目的としている。従来、情報構造の観点から「焦点」「トピック」「テーマ・レーマ構造」といった概念を用いて倒置は説明されてきたが、これらでは従属節内での倒置を説明することができない。従属節内での倒置現象を整合的に説明するためには、主語名詞句と動詞それぞれが担う相対的な「情報の重要度」が必要であり、情報の重要度を測定するためには、主語名詞句と動詞の相対的な長さ、主語名詞句が定か不定か、主語名詞句に対比の意味が含まれるかどうか、動詞がêtreやavoirあるいは動作ではなく存在の意味を表すなど、意味が希薄なものであるかどうかといったパラメータを提示している。これらのパラメータにもとづいて主語名詞句と動詞の情報量を比べたとき、主語名詞句の情報の重要度が相対的に高いときに倒置が起こるといふ仮説である。</p> <p>第3章は、従属節内が場所句を伴わず、動詞＋主語の語順となっている用例に関して、コーパスを用いた調査とその分析を行っている。先行研究においても、前提を表す制限的關係節では倒置が多く、断定を表す非制限的關係節や、理由や譲歩を表す副詞節では倒置がされにくいといった指摘がなされてきた。本研究ではその傾向を実証するだけでなく、非制限的關係節は副詞節よりも倒置の頻度が高く、關係節の中において制限的關係節よりも頻度が低いだけであることなど、従属節のタイプ自体が重要であることを明らかにしている。さらに、情報の重要度にかかわるパラメータのうち、一方の極に必ず倒置が起こるパラメータとして主語にかかる否定や限定があり、他方の極には必ず倒置を妨げる、動詞が直接目的語を伴うというパラメータがあつて、その他のパラメータはこれら2極の間で段階性をなしていることを明らかにしている。</p>			

第4章は従属節内が場所句＋動詞＋主語の語順となる倒置を分析している。主節において場所句が文頭に前置されるときには倒置が起りやすいという指摘が先行研究にはあるものの、この説明が従属節にも該当するかどうかについて一致した見解はない。そこで本章ではコーパス調査にもとづき、場所句の前置が従属節内でも倒置の頻度を高めるかどうかを分析している。その結果、通常は非制限的關係節や、時間や目的、理由を表す副詞節、そして補文では倒置が好まれないにもかかわらず、場所句が前置されるときには倒置の割合が飛躍的に高くなることを明らかにしている。場所句の前置によって引き起こされる倒置は主節に限られた現象ではなく、従属節でも観察されるという結果であり、これに加えて、前置された場所句は主語名詞句の指示対象が存在・出現する状況の設定に関与しており、必然的に動詞の担う情報の重要度が低くなるという仕組みを意味的側面からも説明している。

第5章は、従来の情報構造の研究にもとづく「焦点」に代えて「情報の重要度」という概念が必要となる理由を理論的に探求している。そのために本章では、主語が唯一の新情報となる文脈において倒置が許容されるかどうかをインフォーマント・テストによって分析している。その結果、ほとんどの従属節において主語名詞句のみを焦点化する操作は容認できないことを明らかにし、さらに、前提を表す副詞節や制限的關係節など、焦点とはなりえない従属節内で倒置が頻繁に使われることについては情報の重要度という概念が有効であることを示している。また、情報の重要度を構成するパラメータのうち、主語が担う対比的意味の効果を検証するためのテストを行うことで、通常は倒置が容認されず、また主語名詞句が焦点ともなりえない接続法を使った補文などにおいても倒置が容認されることを明らかにし、情報の重要度の存在を主張している。

第6章は結論であり、各章での分析結果を概括し、先行研究との違いを改めて説明するとともに、本論文では十分な説明には至らなかった従属節の前提と断定の区別に関する問題など、今後の残された課題を示している。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

情報構造が語順に影響を与えることは周知の事実であるのに対し、その議論は主節にはほぼ限定されており、従属節内の情報構造が語順に影響を与えるかどうかという問題を包括的に扱った研究は少ない。本論文は、従属節内での文体的倒置、すなわち文法的に義務的ではなく倒置が用いられる現象について、補文、関係節、代表的な副詞節を対象としたコーパス調査と、作例を用いたインフォーマントによる容認性判断によって、「情報の重要度」という概念によって従属節内で倒置が生じる理由を説明するものである。この論文の価値は記述的側面と理論的側面の両方に認めることができる。

まず記述的価値として、大規模コーパスFrantextを用いた調査にもとづき、実証的に研究を進めている点を高く評価することができる。従来は主として母語話者の直観によって「非制限的關係節や理由を表す副詞節ではほとんど倒置が起こらない」などと説明されてきた現象について、必ずしもそれらの統語環境で倒置が容認されないわけではないことを実証している。それだけではなく、第3章においては関係節内の中でも先行詞の性質によって倒置頻度が異なることや、副詞節では一様に倒置が排除されるわけではないこと、第4章では、通常では倒置が起こらないと考えられてきた環境においても場所句の前置によって倒置が起こりやすくなることなど、本論文がもたらした新たな記述的知見は多い。本論文の調査は、たとえば関係節もNP queだけではなく、dont, ce que, où, lequelなども調査対象とし、さらに多様な副詞節に加え、その副詞節が主節に前置されているか後置されているかといった詳細にも立ち入って行われており、これは単にコーパスを検索し、数値を計測するだけではなく、膨大な実例を観察することではじめて可能になるものである。この記述的価値は高く評価すべきものである。

理論的には、情報構造が語順に影響を与えるという現象が主節に限定されるものではなく従属節にも及ぶこと、換言するならば、主節ほどの強力さではないものの、従属節内にも情報構造が存在することを、「情報の重要度」という独自の基準を用いることで証明していることが特筆に値する。この論文の最重要概念である「情報の重要度」を定義するにあたっては、主語名詞句にかかる条件、動詞句にかかる条件としてあまりに多くのパラメータが雑多に用いられている印象は否めないものの、必ず倒置が起こる要因から必ず倒置が妨げられる要因の間をスケールとして捉え、中間部分で作用するパラメータの間にも段階性を設けるなど、先行研究で提示されてきた倒置を引き起こす要因を正しく評価した上で自身の理論に組み込んでいる。そもそも、文体的倒置という、適格文と非文という形で判断することができない現象を扱っているため、この理論化のあり方は現象を過度に単純化して捉えるのではなく、実態に則した説明を目指した結果として評価すべきだと考えられる。

その一方で、残された課題や改善すべき点も残されており、少なくとも大きく2点を指摘することができる。1つは、現象として否定証拠が出しにくい問題を扱ってはいるものの、言語学であるからには、最小対を用いたテストなどで容認性や選好性という形で結果が出せる形の分析が望ましく、これは第5章では部分的に実現できている。これに対し、第3章、第4章はコーパスデータのうち、自分の理論に合わせて用例を選んでいくという印象を与える恐れがある。データに見られる正例を操作し、条件を満たしていないときには選好性が下がることを示すなど、別の方法による分析結果も示せていた方がより説得力のある議論になったと考えられる。

もう1つは、本論文の提案する「情報の重要度」という概念と密接に関連する、一般的な情報構造をめぐる議論でよく使われる概念、特に断定や前提、焦点の区別にも課題が残されている点である。第6章の今後の課題としても触れられてはいるものの、第3章～第5章の議論では、「前提を表す制限的關係節では倒置が起こりやすい」という説明がある一方で、「焦点は断定を表す節の中に現れるものであり、従属節内での倒置は焦点化の操作とは言えないものの、断定を表す節の中で重要な情報を担うために生じている」というように、断定と倒置の相性の良さを示していると思える記述もあり、部分的な混乱が生じているように見受けられる。トピック・コメント、前提と断定、そして焦点といった概念は論者によって定義が異なることもあるため、この責任は本論文のみに帰せられるものではない。しかし、これらの主要概念を改めて整理し、本論文の「情報の重要度」という概念をさらに精密に定義することにより、この新しい概念の有効性をより説得的に示すことができるものと考えられる。

以上のように、残された課題はあるものの、本論文が言語学、とりわけフランス語学における情報構造の研究に対してなした記述的・理論的貢献は高く評価すべきものである。よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年12月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降